畑中さんの思い出

守山史生*

私が畑中さんに始めて会ったのは，昭和 20 年 4 月 1 日，東大に入学を許されて天文学教室に来た時である．但し場所は本郷とか麻布ではなく，長野県の上諏訪であった．丁度この年の 4 月から天文学教室は戦火をさけて上諏訪に疎開したのである．度々の空襲で焼野原になった名古屋を逃げるようにして満員の夜行列車に乗り無気味な空襲警報で夜中にたたき起こされることのない生活を期待しながら諏訪に着いた時の嬉しさは今でも忘れられない．ところが天文学教室の宿舎である小さな旅館に着いてみると，新入生は上諏訪でなく下諏訪で物理や数学の学生と一緒に講義をうけ，しかも宿舎は 4 月 7 日に開かれるとのことであった．この報せは当然東大から名古屋の私の下宿に送られたはずであるが，空襲時の混乱のため延着あるいは不着になってしまったのであろう．天文の宿舎には収容の余裕はないから，7 日に出直して下諏訪にゆくようにといわれた時には，全くがっかりして声も出ないくらいであった．

食糧その他生活のための環境の極度に悪かった当時としては当然のことであるが，私としては名古屋の下宿はすっかり引払ったし，兵庫県の自分の家に帰るとしても切符がすぐ手に入るかどうか分らない．汽車の混雑を思い，何よりも焼夷弾・爆弾の降ってくる都会へ戻ることの憂うつを思うと，情なくて，何とかして天文の宿舎かまだ開かれていない下諏訪の宿舎に入れて貰おうと，応待に出て来た上級生と押問答をくりかえしていた．その時二階から降りて来たのが畑中さんで，勿論私は名前も顔も全然知らなかったのであるが，我々の話を聞き，「それは可哀相だ．ここも余裕はないけれど，下諏訪へ行くまで一週間くらいなら何とかしてやろう」と私の我儘を聞いてもらったのである．

こうして私は，東京から送られて来た図書を小高い丘の上の小学校に運んだり，空腹をまぎらわすため温泉に入りすぎて気持が悪くなったりするような生活をしながら，約一週間畑中さんと一緒にくらした．当時は畑中さんは，最近の様子と全くちがって痩身で，眼光が鋭く精悍そのもののような外観であったが，パイプにとうもろこしの葉をはじめ正体不明の植物を干したものをつめてくゆらしながら雑談している態度はまた悠然たるものがあり，つい数日前まで焼夷弾の下で右往左往していた私などは，戸惑いを感じたほどである．

その後私は下諏訪に行き，畑中さんと会う機会のないまま終戦を迎えた．終戦後，天文・物理・数学の教室はまた東京に戻ったが，私は郷里に帰ったまま昭和 21 年の春まで遊んでいた．そして 21 年の 4 月上京して本郷の正門をくぐった所で，畑中さんにバッタリ会った．挨拶もそこそこに「下宿に困っているのだったら，東大も寮をつくっているから利用したらどうか．その気があるなら早い方がよい．一緒に本部へいこうか」と畑中さんにつれられて，私は学生部へ様子をききにいったのである．その時すぐには寮に入らなかったけれども数カ月後に横須賀の寮に入り，そこから三年間卒業まで本郷に通うことになった．

私が高校学校にいる時，高校の先生は学生の面倒をよくみてくれるが，大学へ行くと仲々先生との個人的接触の機会がないということを聞かされていたので，畑中さんの親切は意外でもあり，また実に身に泌みて嬉しかった．しかし考えてみると畑中さんはこの親切さの故に，後年莫大な仕事をかかえるようになり，結局体を亡ぼしてしまったような気がするのである．私の学生時代-昭和 20 年から 24 年までの間に，世の中はずい分変ったが，畑中さん自身も痩身から急に肥りだして，堂々たる体軀にかわられた．心なしか眼光も鋭どさがかくれて，やわらかくなった様な気がする．恐らくこの前後どちらかの畑中さんしか知らない人は，ほくろがなければ同一人と identify 出来ないのではないだろうか．

学生時代は，非常に親切な偉い先生という印象しか持たなかった私であるが，大学を卒業して天文台に来てからは，畑中さんは直接仕事の上でのボスということになって，日常の接触も多くなった．天文台では，私の就職した年から太陽電波の観測が始められた．赤道儀式にマウントされたビーム・アンテナを 30 分に一回手で動かして，太陽を追いかけるという極めて原始的な観測である．アンテナの近くに建てた小さな小屋の中で，受信機のスピーカーから流れでる「シュー」という音をききながら，時々入る混信をチェックし，タイム・マークを入れるのが観測者の仕事で，我々はこれをノイズ番と称していた．畑中さん，現在シドニーにいる鈴木さん，と私の三人が交替で，お守りをしていたのである．私はよく三十分毎にアンテナを動かすのを忘れて，お目玉を喰った．また観測は日曜も休みなしに行なわれたが，月給の出た直後の日曜日にノイズ番がまわって来て，街の灯の恋しい私が浮かぬ顔をしていると，「遊びにいってこいよ」とかわってもらったことも度々であった．

私は天文台に入ってからしばらくは，海野，石田，安

* 東京天文台

田の諸兄たちと共に台長官舎の畑中さんの部屋の隣りで寝泊りしていた．畑中さんが酒豪であることを知ったのもこの頃である．当時は食糧事情もまだ悪く，私も海野さん達と天文台の中でさつまいもを作っていた時代で，米の代りに砂糖が配給になったことがあった．砂糖でカルメラをつくり，その上にアルコールを注ぐと，臭みが幾分とれることを誰かに教わって，紅茶でそのアルコールをうすめ酒がわりにしてコンパを行なったことを思い出す．それが月日の立つと共にオーシャン・ウィスキーの水割りになり，ビールと上昇していったのは，畑中さんが最初にアメリカに行かれた頃であろうか．酒がまわると，太った腹をたたき乍ら，"波浮の港" を低唱する姿が，今でも鮮やかに私の眼底に残っている．

私の記憶に間違いがなければ，最初の渡米から帰られて間もなく，畑中さんの本務が天文台から東大の天文学教室に移られたように思う．そしてこの頃から畑中さんはだんだん忙がしくなって，最後には仲々自分の時間が持てないようになってしまわれたようである．畑中さんの手帳にはスケジュールが一杯書きこんであって，手帳がないと身動きが出来ないように見受けられた．天文台に顔を出す回数も一週に一回程度となり，毎週火曜日の輪講の時が畑中さんと顔を合せる唯一の機会のようになってしまった．丁度なくなられる二日前，私は畑中さんに呼び出されて一緒に文部省に行き，本郷への帰り道，昼食をともにした．その時「一緒に昼飯をたべるのは随分久し振りだねえ」と，すしをつまみ乍ら電波天文学の将来について抱負を語られたのが，私にとって畑中さんと親しく言葉を交した最後になった．急逝の報に驚いてお宅に伺った時の畑中さんのデス・マスクは全く寝ている様子と変らないものであったし，私には畑中さんの死がまだ実感となって身に迫ってこないものを感じる．外国へ出張に行って留守の時のように，しばらくするとまた元気な顔を三鷹の天文台に見せられるような気がしてならないのである．

畑中武夫博士主要論文著作目録

Japanese Journal of Astronomy and Geophysics
○Intensity of Forbidden Lines and Abundance of OII and OIII Atoms in Planetary Nebulae, Vol. 20, p. 19. 1943. ○On the Radiative Transfer in an Expanding Planetary Nebula, Collab. with Mr. Y. Hagihara, Vol. 21, No. 1-2, p. 45, 1944. ○Theory of Optical Interaction among HeII, OIII and NIII Atoms in a Planetary Nebula, Vol. 21, No. 3, p. 1, 1947.

Publications of the Astronomical Society of Japan
○Polarization of Solar Radio Bursts at 200 Mc/s, I, Collab. with Messrs. S. Suzuki and A. Tsuchiya, Vol. 7, p. 114, 1955. ○The Faraday Effect in the Earth's Ionosphere with Special Reference to Polarization Measurements of the Solar Radio Emission, Vol. 8, p. 73, 1956. ○On the Condensation of Interstellar Gas, II (Gravitational Instability), Collab. with W. Unno and H. Takebe, Vol. 13, p. 173, 1961. ○On the Condensation of Interstellar Gas. II, (The Mass Function in Galactic Clusters), Collab. with Messrs, H. Takebe and W. Unno, Vol. 14, p. 340, 1962.

Tokyo Astronomical Bulletin
○On the Hydrogen Content of the Sun, No. 449-450, 1941.

Report of Ionosphere Research in Japan
○Solar Radio Outburst and Increase of Cosmic Ray Intensities on September 20, 1950, Collab. with Messrs. Y. Sekido, Y, Miyazaki and M. Wada, Vol. 5, p. 1, 1950. ○Emission of Corpuscular Streams by Solar Flares, Vol. 5, p. 132, 1951. ○On Some Features of Noise Storms, Collab. with Mr. F. Moriyama, Vol. 6, p. 99, 1952. ○A Model for the Solar Enhanced Region at Centimeter Range Derived from Partial Eclipse Observations, Collab. with Messrs. K. Akabane, F. Moriyama, H. Tanaka and T. Kakinuma, Vol. 9, p. 195, 1955. ○Variations in the VLF Emissions with Reference to the Exosphere, Collab. with Miss S. Yoshida, Vol. 16, No. 4, 1962.

Proceedings of the Physical Society of Japan
○On the Coronal Lines, Vol. 19, p. 1023, 1937. ○Helium Emission in the Solar Chromosphere, Collab. with Mr. M. Kondo, Vol. 22, p. 105, 1940.

Progress of Theoretical Physics
○Populations and Evolution of Stars, Collab. with Messrs. M. Taketani and S. Obi, Vol. 15, p. 89, 1956.

Research Report of the School of Electrical Engineering, Cornel University.
○Position and Polarization of Solar Radio Bursts on 200 Mc/s, EE 179, Scientific Report No. 2, 1953, ○Reflection of Radio Waves from the Sun, EE 450, Tech. Rep. No. 2, 1959.

Proceedings of the I.R.E. Australia
○Radio Astronomy in Japan, Feb., p, 243, 1963,

Природа
○Исследования Солнца в Японии, No. 8, p. 1, 1959.

東京天文台報
○太陽彩層ヘリウム輝線の観測，近藤正夫氏と共著，第7巻，80頁，1939年．○惑星状星雲における〔OIII〕スペクトルについて（ガス状星雲に関する研究，A），第8巻，188頁，1940年．○惑星状星雲におけるOII及びOIII原子の数（ガス状星雲に関する研究，B），第9巻，1頁，1942年．○惑星状星雲におけるHeII原子の問題（ガス状星雲に関する研究，C），第9巻，8頁，1942年．○惑星状星雲におけるOIIIとHeIIの光学的相互作用について（I）（II）（ガス状星雲に関する研究，D，E），第9巻，107，163頁，1942年．

天文月報
○太陽コロナスペクトルに関する研究の現状（I）（II）（III）（IV），第13巻，168，184，204，220頁，1938年．○星のエネルギーの話（I，II）．第33巻，56，72頁，1940年．○惑星状星雲の光，第37巻，1頁，1944年．○太陽電波の話，第43巻，129頁，1950．○星はいかにして生れるか，第43巻，35頁，1950年．○電波天文学の進歩をたどって，第47巻，74頁，1954年．○